

寺
ごよみ

一
月

一日 元旦 年頭参り
三日 日曜学校カルタ会
四日 栗虫御助成会
五日 浦山お経会新年会
七日 善巧寺若婦人会新年会
八日 栗虫・報恩講
九日 宇奈月夢を語る会新年会
一二日

御正忌報恩講

一三日 後一時 遠夜
一四日 後一時 遠夜
一五日 前十一時半 お講
後一時 遠夜
後七時半 初夜
一六日 前十一時 お講
後一時 お満座
◇親鸞聖人のお祥月法要です。
是非ともお参り下さいませ。

寺報
善 巧

発行
〒938 富山県下新川郡
宇奈月町浦山497
白雪山 善 巧 寺
☎宇奈月 0765(65)0055

賀正

生かさるる
いのち尊し
けさの春



修復なった善巧寺本堂の大屋根

一月十六日は親鸞聖人の祥月命日です。此の日のことを「本願寺聖人伝絵」には、次のように記しています。

「聖人 弘長二歳壬戌仲冬下旬の候より いささき不例の氣まします。自爾以来口に世事をまじへず、ただ仏恩のふかきことをのぶ、声に余言をあらはさず、もはら称名たゆることなし。しかうして同八日午時頭北面西右脇に臥給て、ついに念仏の息たえましましをはりぬ。千時類齢九旬に満たまふ。」

弘長二年十一月二十八日ですが、本派本願寺派ではこれを太陽暦に直して、一月十六日として居ります。龜山天皇の時、当時、鎌倉に幕府が置かれて居りました。一二六二年というと七百二十三年前になります。七百年の大遠忌から数えても、もう二十三年になります。

毎年、此の日、本願寺派の全国の寺院で、御正忌の法要が勤修されます。善巧寺でも別掲の如く、御門徒衆一堂に会して、厳肅な御法要が勤まります。

親鸞聖人は、御年九十で亡くなつて居られます。私達は、今日、「鏡の御影」で、その顔、そのお姿を、僅かに偲ぶに過ぎないので、すが、九十才になられても、その信仰心にいささかの揺るぎなく、

念仏の声の中で往生なさった時の様子が、伝絵の記述の中に感ぜられます。

京洛の一月は、寒さの絶頂のときです。弟の尋有の禪坊は、押小路南万里小路東にあつて、その住居は、恐らく民家に似通つた道場で、簡素な構えだつたと思われまふ。本尊には、名号が掲げられていたことでしょう。

そして、臨終に立会つた人は、益万、覚信尼、尋有の肉親と、洛中居住の門侶たち僅少な人数だつたでしょう。

此の中で、発病以来、口に世事を交えず、仏恩の深きことをだけ述べ、声に余言をあらはさず、称名念仏絶えることなく、九十の生涯を終えられた聖人の御臨終は、本当に尊いものでありました。

御正忌は、聖人を偲ぶ大切なお日柄です。善巧寺門徒は、祖先の昔から、降る雪の中を、寺へ御出でにな

りました。そして、親鸞聖人のみ教への流れを汲む私達昭和の老若も、年一度の御正忌を、善巧寺本堂で仰えましよう。

親鸞忌身を粉にしても報ずべし
親鸞忌北国婆の濃き匂
池田 嘉祿
平畑 静塔

百姓は野良着のま、や親鸞忌
久我清紅子

御 正 忌



善巧寺大屋根修復完成

昭和五十九年十月十日

善巧寺の大屋根修復工事は、門信徒の皆様のおかげをもちまして五十九年十月十日、めでたく完成いたしました。

天井、ハネ木、ハリ、タル木等のほとんどを一新、屋根の造りも切妻から入母屋にかわり、棟も二

午前中はご遷仏。五カ月間、空華殿に安置されていました、ご本尊が、住職や総代さんの手で本堂内陣の御宮殿に移されました。

午後からは完成式で、読経のあと、住職の謝辞があり、ご尽力いただいた工事関係者に、感謝状と記念品が贈られました。

式後、庫裡広間では祝宴が催され、工事関係者の労をねぎらうと共に、総代

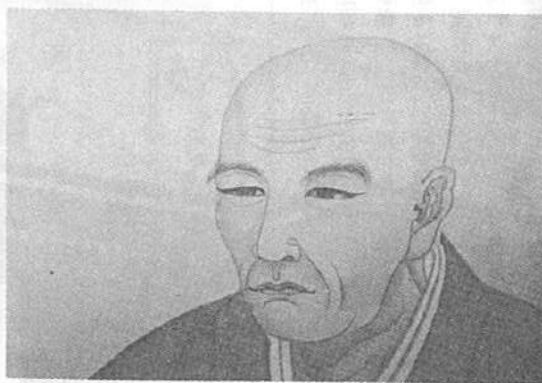
ともども、大屋根修復完成を、心から喜び合いました。

なお、今回の修復工事で、正棟梁の大藪守さんから、大屋根に輝く九つの定紋のご寄進があったほか、工事関係の吉野工業さん、松原工務店さん、河村左官さん等々から多額のご寄付を賜わりまして紙上より、厚くお礼申し上げます。



十三段のノシがあがり、威風堂々の仕上がりです。

この日、寺では、六根色の幔幕をあげ、工事関係者と総代、世話方が集まって、完成式を行いました。



明教院僧鑑法師

僧鑑(にんかん)本願寺派空華
學轍の祖。名は慶叟。字は
子練、甘露室・空華處、雪
山と号した。

越中・水橋の農家に生ま
れ、幼名を渡辺興三吉と称
した。十一歳で上市・明光
寺の靈澤師につき、二十一
歳で善巧寺の法嗣。京都・
学林にて僧模師の門人とな
り、のち自坊に空華處を設
けて学僧を教育、その門弟
は全国三千人に及ぶといわ
れる。天明三年六十一歳で
入寂。明教院と諡号せらる。

空華語録

三業作罪の凡夫なれども、信を得たるし
るしには、貧瞋の下より仏恩を思いつかせ
たまう。妄念おこらば、サテサテあさまし
きことなりと、且つ恥じ、且つ喜ぶべし。
仏の御慈悲へ、たちもどり
たちもどりして称名相續す
べきことなり。

—正信念仏偈聞書より—



空華處の焼印

講 録

明教院僧鑑語録を味わう〔一〕

行信教校々長 利井興弘師

このたびは、明教院僧鑑師のお

祥月命日、空華忌のご縁でござい

ます。ご当山におかれましては

本堂大屋根修復という、大変な事

業をかかえられ、皆様にも本当に

ご苦労を願ったようでございます。

工事の記録をビデオで見せてい

ただきでしたが、内部の木材がず

いぶん腐っておりまして、工事

そのものも大がかりなものであり

まして、門徒の方々には大変なご

懇念を運ばれたものと思ひ、心か

らおれを申し上げねばなりません。

しかし、まあ、

その時に、私の二

男であります若院

と法輪寺さんが、天井から落ちた

らしゅうございますね。あのとき、

丁度、私と長男とそれからこの

若院と、親子三人で、広島で講演

をする事になっておりまして、

だめかと思っております。松

葉杖をつきましてやってきてくれ

ました。

聞きに来た人たちも、それを見

て、大変なことではございましたと

いいながらよろこんでくれたわけ

でございます。そんな人たちが

うでございまして、有難いことで

ございます。

でも、やっぱり、人間の建てた

ものは、くずれてゆくわけござ

います。手入れをしなくては持た

ない、と口でいえば簡単なことで

はありますが、いただきましたご

懇志は決して無駄には使われてな

い、ということが、よくよくわか

る、りっぱな工事が成されたんだ

ということ、共によろこばせて

いただきましたと思います。

さて、そこで、今日は空華忌で

ございますから、ここに空華先師、

明教院僧鑑師のお言葉(上掲)を

いただきます。味わってみたい

と思います。で、まず、

「三業作罪の凡夫なれども」

と申されてある。三業とは身と

口と意(心)であります。この

三つで罪を作りつつあるのが私た

ちの姿でございます。で、そのと

きに、はつきり申しますけれども

おそろしいとも感じなければ、あ

さましいものかとも感じないで、

うかうかと暮らしているのが私た

ちの生活でございます。

そうですね。私たちは小さいこ

うんだそうです。

で、あちらの潮干狩りというの

はちよつと変わっていて、潮の引

いた海辺へ、夜に出てゆきまして

ひざの下あたりのところまで、松

明を持って入ってゆくんです。そ

したら、その松明—たいまつ—の火

に魚が寄ってくる。これを網で掬

うんだそうです。

それはどういふものかと申しま

すと、山岡鉄舟という剣道の達人

が、愛知県の三河へ潮干狩りに行

ったんです。土地の知人の豪族に

便りをもらって、お弟子を連れて

出かけたんです。

三業作罪の凡夫なれども

もというお言葉が身に

しみるのでございます。

明教院僧鑑師のお言葉(上掲)を

いただきます。味わってみたい

と思います。で、まず、

「三業作罪の凡夫なれども」

と申されてある。三業とは身と

口と意(心)であります。この

三つで罪を作りつつあるのが私た

ちの姿でございます。で、そのと

きに、はつきり申しますけれども

おそろしいとも感じなければ、あ

さましいものかとも感じないで、

うかうかと暮らしているのが私た

ちの生活でございます。

そうですね。私たちは小さいこ

うんだそうです。

で、あちらの潮干狩りというの

はちよつと変わっていて、潮の引

いた海辺へ、夜に出てゆきまして

ひざの下あたりのところまで、松

明を持って入ってゆくんです。そ

したら、その松明—たいまつ—の火

に魚が寄ってくる。これを網で掬

うんだそうです。

それはどういふものかと申しま

すと、山岡鉄舟という剣道の達人

が、愛知県の三河へ潮干狩りに行

ったんです。土地の知人の豪族に

便りをもらって、お弟子を連れて

出かけたんです。

三業作罪の凡夫なれども

もというお言葉が身に

空華忌勤修

11月4・5日



総序のご文の唱和。お満座は、講内の法中が、黒衣黄五条の装束でご出勤。僧鎔師讃仰の表白のあと小経のおつとめがありました。

二日にわたる利井先生のお話は明教院さまのおことばそのままのお味わいで、聴聞の方々の心にしみわたったようでした。

ところで、この空華忌、お寺の法事としては、御正忌、報恩講、祠堂経とならぶ大切なもので、空華の流れを汲む、宗門最高の先生方にご出講いただく、めったにないご縁でありまして、そのことが回を重ねることに広まっているように、門徒さん以外の方も泊りがけでお越しになるほど、お世話の教化推進委や、白鶴会のみなさんも「年々繁盛でけっこうなこと」とよろこんでおられました。

明教院さまの祥月法要「空華忌(第二回)」が十一月の四日、五日の両日、お寺でつとめられました。この法要は僧鎔師の二百回忌を機縁にしてはじまったもので、今回が二回目。境内には今年も鬼原勝次さんから数十鉢の菊が寄せられ、文字通り菊薫る聞法の秋。講師には、行信教校々長の利井興弘師が出講。四日のお建夜にはみんなでお正信偈を唱和したあと「明教院僧鎔さま」の讃歌を合唱。法話もここに掲載しましたように明教院さまのおことばを味わうというもので、わかりやすく、ありがたいお話でした。そして五日は、空華廬の古式にならって、お日中は、帰三宝偈と



さあ、そこで、山岡鉄舟が弟子と一緒にこれをやった。まあ、みんなが一かたまりになっていたんでは魚もとれんというので、皆が思い思いに海の中へ入っていったところが、しばらくすると潮が満ちてきて、おまけに雨が降ってきた。これはえらいことだと、弟子たちが「鉄舟先生」と声をあげながら、あつまってきた。大さわぎであつまったものだから、一体、どちらが沖で、どちらが陸かわからなくなつた。

たいまつかがけて何処へゆく

そしたら、その時、鉄舟先生、「静まれ！」と一喝して、それから、じつと目をつむり、耳をそば立てた。しばらくして、鉄舟は、「こっちだ」と迷わず指差した。で、皆がその方向へ進んでゆくが無事に陸へ着くことができて、助かったんです。

それから皆で豪族の家に引き上げて、そこでまあ、さっきの出来事を話した。

「一時はどうなるかと思ったが鉄舟先生が、さつと方向を示して

法話テープ

お寺では、一人でも多くの方に聞法のご縁を——と、宗門を代表する先生方の講録を、寺報に掲載するほか、録音テープを作成して、門信徒の方々に貸出ししたり、実費でおわけしたりしています。

下さつたから助かった」「さすが鉄舟先生」となった。そしたら、豪族が聞くんです。「先生、よく陸がわかりましたな。」

「そりゃあ、三河の浜千鳥。潮の満干に鳴くと聞いておつたので耳をすまして、その鳴く方を陸と指差したわけだ」

と鉄舟、得意満面で答えた。

「先生、もし、千鳥が鳴かなか

たらどうしました？」鉄舟、うつと答えにつまった。

その時、豪族がいったそうですが「あなた方、その時、松明はどうしてましたか。皆が「そりゃちやんと持ってた」という。そうしたら豪族が「小魚をとるといふような目先の事には松明ほどういものはない。しかし、どちらが沖で、どちらが陸かというよう大きなことには、持った松明役には立たない。なぜそのとき、松明

を水中へ捨てて、陸の明かりをさがさなかったのですか」これには鉄舟、冷汗三斗一ひや汗流しておそれ入ったというんです。

そこで、まあ、私たちがこの世の中で生きてゆくということにつきましては、なんといっても、小さい松明のようなチエが一番必要であります。だから、あのおばあちゃんのかしいとか、あの奥さんはえらいといわれるのは、やっぱり、小さい松明を持つていからでござい

しかし、その松明はというたらいま、仏様から見ますれば、三業作罪の凡夫よのう、ということとでございませう。小さな松明で、目先のことに明け暮れて、罪を罪と知らずに罪を重ねているんです。その私たちに、大きな慈悲で、助かってくれよ、助けさせてくれよとおっしゃって下さっているのが仏様でございませう。よくよくかみしめてみなくてはならないこととでございませう。

寺で聴聞された方も、もう一度テープで聞きなおし、寺報で読みなおすと、一層、味わいが深まります。是非ご利用下さい。また、寺に参れない方、ご病気の方などのお見舞にも貸し出しをいたします。ご希望の方は寺まで連絡下さい。現在、用意しているテープは、五十七年の三法要の実録テープ全五巻、それに空華忌の特別法座の語録、更に、おつとめのテープなどいろいろとりそろえてあります。何も聞かずに終える人生と、お聞かせにあずかる人生とは、ひと味もふた味も違うということを、知っていただきたいと思います。

話題の寺

この一年をふりかえってみますと、これで、善巧寺もけつこう売れっ子のようにありまして、新聞紙上に色どりをそえることも数々あったようです。

正月には若院が、新川経済倶楽部から故池田弥三郎さんとならんで第一回の「新川地域発展賞」を受賞(今年は吉田忠雄さん)▼三月は「インドから菩提樹のタネを黒

部仏舎利塔へ」で善巧寺仏跡参拝

団が▼五月は「富山別院百周年で七〇〇〇人大会」▼六月は恒例「野

休み落語会」▼八月は「国際化時代に生きる女性」で若院の対談特集

や、エッセイ▼九月は「高橋竹山名人会」▼十月は「こどもフェスティバル」で雪ん子が絶賛▼十一月は北日のこころのページで若院のコラム(左)▼十二月も北日で(下)……とずいぶん話題になったものです。

しかし、なんといつてもマスコミより口コミ。あなたの一言が善巧寺を育てます。今年もよろしく

好きな言葉

雪山 隆弘

逢えてよかった

ノロケ話になりますが、この言葉、女房がいつてくれたんです。

もう、七年前になりますか。長男の隆隆が三つの子でして、食卓を囲んで、七人家族が晩ごはんを食べていました。すると、隆隆が聞くんです。

「ねえ、この中で、一番最初に生まれたのは、だれ？」

「一番、二番と、順番をつけるのが好きだったのよ。」

「当てるん？」

「うん、一番は、おじいちゃん。」

「当たり前。」

「二番は、おばあちゃん、三番はお父ちゃん、四番はお母ちゃん、五番は……お姉ちゃん、六番は……僕くん、七番は……のりくん。」

とやり出した。これが止まらないんです。

ごはんを食べながら、何度も何度もくり返して、一番はおじいちゃん、二番はおばあちゃん、三番はお父ちゃん、四番はお母ちゃん、五番はお姉ちゃん、六番は自分、七番は弟の隆隆……といつてよろこんでいる。そのようこんでいる姿を見ながら、こちらも、ニコニコよろこんでいました。

ところが、しばらくすると、今度は、フツとまじめな顔をして、みんなを見まわして、そして、不思議そうな顔をして、こんなことをいふんです。

「みんな、生まれたね。」

なんだか、ボツと胸に灯がともったような気分になりました。で、隆隆に、どういってやうかと、ちょっと考えていました。

そうしたら、そのとき、女房が

「そうね、みんな、生まれたね。逢えて、よかったわね。」

といったんです。私は女房に悔(ほ)れ直しました。

いや、本当に、この世に生まれて、みんな、逢えて、よかったわね。

(善巧寺副住職・宇奈月町)

とやま人物風土記

<497>

宇奈月町の夢語り・昔語り

雪ん子劇団

雪山 隆弘・玲子



イ新聞、タリフジの記者に。ニッポン放送パーソナリティーとしても活躍するなど、ジャーナリスト生活を十年経験した。学習院大出でKNBアナを三年務めた妻の玲子さんと、四十二年に結婚した。義父の俊之(セー)善巧寺住職は、元富山女子短大教授。

浦山へ来て三年目の五十二年、布教活動の一環として「宇奈月夢を語る会」を発足させた。メンバーは六人。農家のお年寄りやスーパード主ら地元の壮年グループと知り合い、意気投合したのが発端だった。「地域に夢のある文化を」と、月一回集まり、飲みながら語り合った。子供も老人も喜ばせ、自分たちも楽しめるユニークな試みはないものかと。

「舞台作りは任せて」と買って出る。お陰で児童たち五十人の演じた「うちのお父ちゃんえらいんだ」は、大成功。玲子をほろりとさせた。

雪山隆弘(旧姓・利井(かがい)、浦山)は、浄土真宗本願寺派善巧寺の若院。地域文化の創造に打ち込むリーダーだ。大阪府高槻市出身。三十八年に早大文学部演劇専修を卒業後、サンケイ新聞、タリフジの記者に。ニッポン放送パーソナリティーとしても活躍するなど、ジャーナリスト生活を十年経験した。学習院大出でKNBアナを三年務めた妻の玲子さんと、四十二年に結婚した。義父の俊之(セー)善巧寺住職は、元富山女子短大教授。

「寺がハートのある公民館だとすれば、劇団はもう一つの学校だな。隆弘は満足そうに言う。

お寺で仏前結婚式



めぐり会い、そして結ばれる二人、み仏の光につつまれて、暮れの十二月二日、善巧寺本堂

式の日、十人の親族と一緒に超越になったカップルは、紋付袴と振袖姿。奏楽の中、やや緊張して式場の本堂に着座。讃仏偈のお

で心あたたまる仏前結婚式が行われました。
新郎は朝日町笹川の陶芸家、川内登さん。新婦は同町泊の魚津直子さん。コマーシャルベースに乗ったベルトコンペア式の結婚式に疑問を持っていたお二人が、そろって秋の野あがり名人会、高橋竹山の三味線を聴きに善巧寺へ来院された際、

つとめのあと、司婚者の若院から誓いの言葉を求められ「み教えにしたがい、外にあっては世のため人のため、内にあっては夫婦互いに仲睦まじく」と朗読。めでたく結ばれて、記念の念珠を互いに手に手をとってかけ合い、そろってお焼香。続いて親族も全員お焼香。このあと、司婚者からお祝いの言葉がのべられ、二十分程度は終わりました。

世間ではこのあと三三九度の杯ということになるのですが、仏法では、三は割り切れないから、切っても切れない、などというバカ気たエンギかつぎはしませんので、緋毛せんの数かれた奥座敷、空華殿で、華やかにシャンパンでお祝いの乾杯をいたしました。

いまま、お寺では、門信徒の方々に、仏前結婚式をおすすめしています。まごころもつたおもてなしで、思い出に残る結婚式をいたします。

仏前結婚式—それは、仏様の前で、行い愛情確認の場です。
仏前結婚式—それは、これから、の敬愛と和合の生活を誓う場です。
仏前結婚式—それは、仏前です。

十二月十六日 小雨

京都 松ヶ崎にて。

十一月十二日京都で亡くなった弟の三十五日忌に当る。松ヶ崎の弟宅に、内輪の者だけ二十名集まる。雨も落ちて来て、薄寒い日。私は六人兄弟の長男。男三人女三人の兄弟姉妹のうち、第二人共に失ったことになる。

真実院釈明心と書かれた位碑の前で、小経一巻をあげる。義弟が助音してくれる。

妹三人が、夫々、大阪、姫路、木津から来て焼香する。兄弟でありながら、何年ぶりの集合である。仏は、寅年の七十才だった。

京都大学の農学部を出て、官吏として農業島の仕事に従っていた。

数年前に退官してからは、好きな植木の世話などして、所謂、晴耕雨読の暮らしをしていたらしい。子供は男子一名。孫が二男一女。亡父が遺してくれた

松ヶ崎のこの邸は、二百坪。昭和十一年に買ったもので、当時は、周囲の殆んどが田圃だった。前も、横も、畠で、此の辺の名物である「すぐき」を作っていた。二階の部屋から、



住職日記

家の前の道路に、表を作った戦争中の食糧難の話もある。弟は、院号の如く、真実一路の一生を送り、酒も煙草もやらなかった。専門が農業だけに、植物が好きで、色々

比叡山が真前に眺められるのを、亡父は殊更に悦んでいたのを覚えている。それから四十八年も経過したのだから、周囲の景観が一変するのも無理はない。

法事が終わって、会食の席となり、妹たちと故人の思い出を話そううちに、三十年、四十年の昔の回旧談になる。小生自身も、昭和二十三年迄十年間、此の家に住んだことになる。

自分が持っている仕方が無いから兄さんが保管してくれという手紙だったが、あれが弟から貰った最後の手紙になった。
亡くなったのは、洛北宇多野病院で、恰度、紅葉の美しい時だった。車椅子の上から、附近の山々を眺めたのが最後だった。
次の百か日法要に、此処で集まることを約して夫々に帰路につく。
丹精の松の枝ぶり冬構え
柚子もぐや暮るるに早き松ヶ崎

一日 お講・浦山
二日 浦山・報恩講
一日 太子会
一六日 お講・松沢
二〇日 教化推進協議会
二四日 雪ん子劇団春の公演

寺 三 月

二一日 下立・報恩講
二二日 舟見・報恩講
二五日 入善・泊・報恩講
二六日 杉屋・熊野・報恩講
二八日 下立・報恩講
音沢御助成会
二一日 下立・報恩講
二二日 舟見・報恩講
二五日 入善・泊・報恩講
二六日 杉屋・熊野・報恩講

寺 二 月

一日 お講・浦山
五日 三日月・報恩講
六日 生地・获生報恩講
七日 下立・報恩講
音沢御助成会
二一日 下立・報恩講
二二日 舟見・報恩講
二五日 入善・泊・報恩講
二六日 杉屋・熊野・報恩講

んなに認めていただく場です。
仏前結婚式—それは、み仏に奉告をする場です。
今回の仏前結婚のビデオテープも準備しました。門信徒の方で、ご縁ある方はどうぞご相談下さい。

境内でようこそ 門球大会

暮れの十二月九日、お寺の境内で「第一回ようこそゲートボール大会」宇奈月夢を語る会、善巧寺

教推協共催）が開催されました。

出場チームは、三日市A、浦山新、下立愛本A、音沢ABの計一〇チーム。いずれ劣らぬ強豪ぞろいで、ゲームはスタートから白熱戦を展開。優勝候補と思われた、三日市、浦山新、下立愛本が惜しくも破れて、決勝は、試合巧者の浦山上町と、実力と応援力で勝ち進んだ音沢が対決。結局一五対一〇で浦山上町チームが初の栄冠を獲得しました。

ところで寺の境内の門球コートは、五年前につくられたもので、中央に大イチョウを仰ぎ、ナイター設備もあり



善巧寺の常例行事

お経の会	婦人会	壮年会	雪ん子劇団	日曜学校	お講
毎月 第一・第三土曜日	毎月 第一・第三土曜日	毎月 第二・第四土曜日	毎月 第一・第三土曜日	毎月 第一・第三土曜日	毎月 第一・第三土曜日

という名コト。夢を語る会の月例大会や、日曜学校の子供たち近所の門徒さんたちもプレーを楽しんでいます。

今回集まった門信徒のみなさんも「環境・設備ともに申し分なし。」

年頭告知板

お祝い

お祝い さんおば あさんの誕生日に、お祝いカードと、小冊子を贈っています。多くの門信徒の方によりこばれていきます。現在、寺の名簿では明治大正生まれを合わせて計三五〇人の方。まだ届いていない方、どうぞご一報下さい。それから、お孫さんの誕生日にも、お父さんお母さんに、ステキなメッセージをお贈りしますので、是非是非ご連絡下さい。

入学・入社

小学校、中学校、高校、大学、入社、入社の折にも、カードや、記念品を贈ります。人生の節目に、心の榮養を。

新築

むかし、新築のお宅に、おナベを贈っていました。そこで、今年から装いも新たに、三ツ折の「お名号」を本山から下附していただきます。もちろん、これまでに新築されたお宅でも、けっこうです。総代さんを通して、寺へ連絡して下さい。

結婚

二人の門出に、仏教聖典と懐中名号をプレゼントしますが、それによりお寺で仏前結婚式を挙げられることをおすすめます。詳しくは七頁をどうぞ。

いろいろなお祝いの準備が整いました。お祝い事を、味わい深いものにするために、どうぞ、気軽に、ご一報下さるよう、お待ちしております。

合 掌

年末年始は、どうもアミダ様のいうことを聞いているものにとつては、居心地のよくない季節です。

信者でもないのにクリスマスに巻き込まれそうになり、やっとな夜の鐘と思ったら、受験生がエンギをかついで九十から百の間をゴンゴンやってくる。げに煩悩は……とニガリきってお正月。

門松は年神さまとやらの目印だし、玄関の千両万両は商売繁盛。座敷のナンテンは難を転ずるとかの子供じみたゲンかつぎ。

おせちはおせちで、ぞうにで長モチ、マメでマメマメ、田作で豊作、数の子で子だくさん……と、これはもう、ほとんどビョーキ。

やっではないけない、食べてはいけないというわけじゃないけれど、こういうかつぎ心から、差別を生み、だまされやすい子を育てることになることを忘れたくありません。「深く因果の道理をわきまえて、現世祈とうやまじないを行わず、占いなどの迷信にたよらない」これが真宗の生活信条なのでありますが……。とにかくまあ、今年もよろしく、よろしく……。



一月十三日より十五日まで
布教 当山若院
而正忌報恩講